



曾山和彦先生

新貝 まず、参考になる本を探したり、研修を受けたりしました。曾山先生のお話の中で、支援の必要な子(以下、「気になる子」とする)だけを特別にもち上げるのではなく、集団全体をもち上げることで、その子自身も上がるという発想は、なるほどと思いました。基本的に本校で考えていた、気になる子に支援することと学級の中での子どもたちとのかわり合いを育てていくという2本軸があつて、つながる学級ができるという考え方に通じると自信がもてました。

曾山 よく、コーディネーターの担当の先生方の悩みで、学んだことを実践していくとき、全体になかなか広がりにくいという声を

聞きます。その辺りのご苦労は、ありませんでしたか。

新貝 提案したときに、意見をいただくことはあつても、「それは無理ではないか」と否定されたことはなかつたです。これはありがたかつたです。

曾山 新貝先生は、コーディネーターの役割として、何が大事だと思えますか。

新貝 校内の先生たちや専門機関とつながっていくこと、ほかの子どもの様子を知らずにつないでいくこと、これらを本心にコーディネーターすることが大事だと思います。

曾山 学校現場を回っていると、「コーディネーターの仕事は特別支援学級の先生の仕事」と誤解している方に時々出会います。もちろん、コーディネーターとして、特別支援に関する知識があるに越したことはありませんが、それ以上に大切なのは、新貝先生が言われたように「つなぐ」役割ですね。わたしは以前、「校内で最もコーディネーターとして力を発揮しやすい立場にいるのはだれか」という調査研究^{※2}をしたことがあります。その結果、校内

での調整、保護者や外部機関との連絡・調整を強く求められるコーディネーターとして、もっとも力を発揮しやすいのは教頭先生であることがわかりました。しかし、ほかの校務を多く抱える教頭先生がコーディネーターを務めるのは難しいという学校もあるでしょう。そこで、新貝先生のような方がコーディネーターとして、管理職とタッグを組み、特別支援の体制づくりをリードすることがよいと思っています。

気になる子が変わるきっかけ

曾山 今宮先生は、担任として学級内の気になる子とのかかわりの面で、日ごろ感じていることがありますか。

今宮 わたしは教師になって3年目ですが、学級の気になる子のことを実感したのは、今年度、5年生を担当したときです。

曾山 そのときのことを話してください。学級の気になる子の様子はどうでしたか。

今宮 4月当初は、気になる子の言動に触れると、わたし自身、「どうしてだろう?」という思い

が強く、さまざまな働きかけを行つても、何がうまくいき、何がうまくいかないのか、つかむことが難しかったのです。そのような思いを常に抱えながらも、とにかく子どもに一生懸命にかかわり続けるようにしました。

曾山 気になる子が変わるきっかけというのはありましたか?

今宮 2学期に入ってから、算数の時間だけ、空いている先生にT2^{※3}として支援に入っていたいただきました。学習につまずいている子、授業中、集中が途切れやすい子がいるため、ユニットやルーティン^{※4}を使いながら、シール表も活用して授業を進めました。支援に入っていたいたおかげで、「これがよい授業だ」とか「こういう授業をみんなでしたいね」という、わたしと子どもたちの共通の認識がもてるようになりました。

3学期に入ってから、空いている先生に入っていたことはなくなりましたが、気になる子も流れがわかり、「このときはノートを取る」「このときは話を聞く」という活動がきちんと定着しました。

※2 「特別支援教育コーディネーターの指定と養成研修の在り方に関する研究」『特殊教育学研究』第43巻第5号 2006年刊
担任を補助する指導者。
※3 学習のねらいの達成に向けた学習単位が「ユニット」、それを組み合わせたのが「ルーティン」。どの子も参加できる、どの子もわかる」授業を目指した、員弁東小学校の授業改善の取り組み。



今宮 奈緒子先生

新貝 高代先生

名城大学大学院准教授
曾山 和彦先生

平塚 晴彦先生

いなべ市立員弁東小学校
住所：三重県いなべ市員弁町大泉1201番地
校長：小林共子 先生
児童数：220名
電話：0594-74-2073 FAX：0594-74-5788
【学校教育目標】
自ら学び、仲間とつながり、豊かな心を持つ子
(平成24年度)

そやま かずひこ*1961年群馬県生まれ。東京学芸大学卒業、秋田大学大学院修士課程修了、中部学院大学大学院博士課程修了。東京都、秋田県の養護学校教諭、秋田県教育委員会指導主事、管理主事を経て現職。社会福祉学博士。学校心理士。上級教育カウンセラー。編著書に『学習に苦戦する子』(図書文化社)、『気になる子への対応術』(教育開発研究所)、『特別支援教育に生かせるカウンセリング』(ぎょうせい)、著書に『時々オニの心が出る“子ども”にアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング』(明治図書)ほか多数。

曾山先生と員弁東小の先生方との座談会 教室でできる『特別支援教育』

三重県いなべ市立員弁東小学校の実践

特別支援教育について連載をいただいた曾山和彦先生と特別支援教育に取り組んでおられる員弁東小学校の先生方にお集まりいただき、よい実践とは何か、成功のヒントは何か、などを教えていただきました。

実践当初の悩みや経過

曾山 員弁東小学校が、特別支援教育に取り組まれたのは、いつからですか。

平塚 平成21年度、いまの小林校長先生が赴任された年からです。県の事業をきっかけにして本格的に取り組みたいという方針を伺って、「学校づくりの視点と校内組織を変えればできるのではないか」と

申し上げたら、校長先生も教頭先生も「では早速2学期から取り組みましょう」となりました。

曾山 どのように組織を変えたのですか。

平塚 それまでは、授業部会、行事部会、生活部会でしたが、授業部会と集団部会と行事部会の3つに再編成しました^{※1}。それぞれの部会で仕事を考えると、ころから始まりました。

曾山 2学期からそれぞれの部会が動き出して、いまの実践の素地がつけられたのですか。

新貝先生は、特別支援コーディネーターをされています。組織が変わって動き始めたときに困ったことはなかつたですか。

※1 授業部会は3人構成。「学習」に関する取り組みを扱う。集団部会は3人構成。部長は特別支援コーディネーターを兼務。学校目標一覧表にあげられるものはほとんどここで扱う。QU調査も。行事部会は全教師の半分を占める大所帯。学校行事・儀式などを扱う。



今宮奈緒子先生

曾山 子どもの変化や伸びが見えるのは、とてもうれしいですね。

今宮 こういう授業をすることで、気になる子も、まわりの子も、理解が進みました。わたしも元気をもらいました。空いている先生にT2として授業に入ってもらったことは、とてもよい機会になりました。

曾山 「ユニット」と「ルーティン」のある授業は、員弁東小学校の学習の特色ですね。例えば、算数の1時間はどのような流れですか。

今宮 最初は計算。基本的な問題で復習したり、時間を計って計算したりします。その後、子どもたちと「今日はこういう勉強をするよ」「これができるようになるよ」が、この時間の目標だよ」

育つても集団は育たないということ、強く思いました。

取り組みの第一歩

「気になる子の理解」

曾山 そうですね。やはりまわりの子たちを育てる、つながりを強くすることが大切ですね。

もう一つ、わたしが通常学級における特別支援で大切だと考えていることは、気になる子の理解です。そして、その障害に合った基本対応(王道)を生かして対応することが大切です。学校では、気になる子の理解について初めはどんなことに気をつけられましたか。

新貝 平成21年度に、わたしがコーデイネーターになったときは、すでに前年度までの研修を通じ



平塚晴彦先生

という課題の確認をします。そして、みんなで考える問題に入ります。それを個々に考えて、みんなで交流して、全体で深めて、まとめをします。その後は練習問題や発展的な問題に取り組んでいます。

曾山 子どもたちも見通しをもつてやれるということですね。

平塚 それが、「ユニット」と「ルーティン」のある授業のいいところです。そして、この授業づくりのベースになっているのが「どの子も参加できる、どの子もわかる」授業づくりです。

まわりの子を育てる

曾山 通常学級における特別支援教育を考えると、わたしの中でいつも心に響いているのは、ある先生が話された「まわりの子を育てたら、気になる子も一緒に育つた」という言葉です。これまでの本誌の連載でも度々ご紹介している親野智可等氏の「ハンカチの話」(※5)が、イメージをもちやすいでしょうか。

まわりの子たちを育てるとか、つながりを強くするとか、という

て、先生方は、ある程度基本的なことを理解されていました。ですから、実際にこの学校にいる気になる子どもたちをどう指導するかという事例研究を定期的に行っていました。

曾山 気になる子について、こういう傾向の子だから、こういう基本対応をしようと意識するのはいいことですね。それが効いているのかな。

平塚 気になる子の理解と対応についてより深めるために、昨年からの発達支援課の専門の先生に来ていただいています。授業参観後のケース会議で、指導助言をお願いしています。

ソーシャルスキルが弱い?

曾山 外部の方の専門的な知見も入れてというのはいいですね。

いまの子どもたちは、ソーシャルスキル(人づき合いのコツ)が弱いといわれます。あるいは自分自身にOKと言えない、つまり、自尊心が弱いといわれます。これらについて、学校として取り組んでいることがありますか。

平塚 組織を変えたときに、本

たことで、今宮先生、何か具体的な事例がありますか。

今宮 今年は学級の女の子と「女子会」をして、とてもつながりが強くなったように思います。昼休み、男の子は外で遊びますが、女の子は教室にすることが多いので、教室で一緒に話をしました。そこで女の子の気持ちをわかってあげると、女の子は元気になると思います。

曾山 わたしが昨年の10月に授業参観したころですね。いい感じでしたよ。

今宮 女の子が多いので、女の子が元気で授業をがんばってくると、男の子もついてきてくれるようになりました。

曾山 平塚先生の学級では、全体を育てることについて何か具体的な事例がありますか。

発達障害のある子どもへの対応には、次のような基本対応～王道～を活かして!

- LD(学習障害)の場合**
-読みの困難に対して-
①教科書の文字を拡大する
②文章の文節ごとに区切りをつける
③本人に文節ごとに○をつけさせる
- ADHD(注意欠陥・多動性障害)の場合**
①シール、スタンプなどのご褒美(報酬、賞)を用いる
②できていることを褒める
③行動の直後に褒める・叱る
④指示は復唱させる
⑤クールダウンの場(気持ちを落ち着ける場所)を設ける
- PDD(広汎性発達障害)の場合**
①カード、手順表等による視覚的な教材を工夫する
②予告、学習手順の伝達などを頻繁に行う
③明確・具体的な言葉をかける(ジョーク等は通じにくい)
④否定表現(悪い言葉はダメ)ではなく肯定表現(良い言葉を使う)で伝える
⑤感覚過敏性のあることに留意する

平塚 基本的には座席の位置と班づくりを大切にしています。気になる子はできるだけ前の方に配置して、わたしの目が届くようにしています。しかし、ずっと見ているわけにはいきません。なので、さまざまな課題に班で取り組むようにしています。このような取り組みを繰り返していくうちに気がついたのは、気になる子の近くにいた子がいちばん伸びたということです。

曾山 先生から見ても、すごく伸びたということですね。

平塚 つげんさんだったり、すぐぶりぶりしたりするような子が人の気持ちを考えて行動するようになりました。

※5 親野智可等「叱らないつけ」PHP 2006年発行

東小スタンダードルール(平成23年度)	
学習	● 次の時間の準備をする ● チャイムがなったら席につく ● 「はい……です」と言う
生活	● 時間を守る ● きれいにトイレを使う ● 校舎内は歩く
集団	● 気持ちのよいあいさつをする ● 友だちの話を最後まで聞く ● みんなのためになる仕事をする

ムがSSTで1時間目は道徳の時間、ほかの曜日は読書と国語の時間との組み合わせです。

曾山 具体的にはどんなことをやっているのですか?

新貝 一応、このようなことをしていきますよといった年間計画があります。学級によって力を入れない取り組みは違いますが、そこは担任の先生に任せています。

曾山 アレンジOKですね。今宮先生、学級での月4回のSSTの流れを教えてください。

今宮 SSTを道徳の時間にもつなげていますので、最初の10分にやることは、これからやることの導入や復習です。次の週から「どっちを選ぶ?」などの二者択一を何度か繰り返し、そのたびに人の話を聞くこと、大事なことの



新貝高代先生

確認というように時間を使っています。行事の前には、もう一度、「褒め上手の演習」を復習すると10分間を使っています。

曾山 人つき合いのコツを学ぶきっかけですから、演習を短時間で繰り返すことはいいですね。二者択一は使い勝手がいいし、ほとんど準備がいりません。わずか5分、10分で終わる。そこに子どもたちは訓練しているという思いは全くない。楽しみながら知らず知らずのうちに身につけていくわけです。

自尊感情の育成

曾山 自尊感情の育成は学校として、どのように取り組んでいきますか。認め感の向上ですね。

新貝 「わたしの四面鏡」※6が役立ちます。おとなしく、自信がない感じの女の子に、「掃除の係の仕事を引き受けている」という項目で班の子全員がマルをつけてくれました。本人も仕事をまじめにやることは意識していたことだったので、みんながマルをつけてくれたことがとてもうれしかったです。みんながちゃんとわたしのことを見てくれていたと思った」と日記に書いていました。

曾山 幼い子どもには褒めることが大切ですが、思春期の女の子の場合は褒めることが逆効果になることもあります。先生が「あなたは、これをがんばっていて、えらいね」と言っても、うれしいとは思って、むしろ「わたしがおとなしいから先生は気をつかって言っている」と、自尊感情が下がってしまうこともあります。「わたしの四面鏡」は、友だちからの評価なので、小学校高学年や中学生に適切なワークといえますね。

新貝 おとなしい子には、自分注目されているという意識をなかなかもたせることができないの

ですが、これはいい機会だったと思います。わたしも、まわりの子がその子を認めてくれたことがうれしかったです。

曾山 先生が、たくさん「〇〇君」「〇〇さん」と名前を呼びかけ、声をかけることも、自尊感情を育てることになります。ぜひ、試してみてください。

これからの取り組み

曾山 以前、平塚先生の学級の授業を見せていただきましたが、「この学級には気になる子がいないのではないかな」と思ったほどでした。学級に溶け込んでいて、それがすごいと思いました。皆さんの話でその秘密がわかりました。

最後に、これからの課題として考えていることを話していただけますか。

平塚 本校が考えていることは、子どもたちのために、自分たちが築いてきたことを、教師が代わってもつなげていけるようにすることです。教師が代わっても、子どもはつながっているのですから。そのためには、「〇〇先生だけ

らできること」ではなくて、実践と研究をふまえ、どの教師でも、どの教室でもできる実践をきちんと伝えていくことがいちばん大切だと考えています。

曾山 コーディネーターが管理職とタッグを組み、特別支援教育を推進する校内体制が整っている員弁東小学校であれば、「ユニットとルーティン」「スタンダードルー」を核とする実践がふれることなく、さらに深まっていくことと思います。

平塚 これからも、「どの子ども参加できる」「どの子もわかる」授業を目指してがんばります。

曾山 「教室でできる特別支援教育」を、全国各地の先生方が、いま、一生懸命模索しています。員弁東小学校の実践は、そうした先生方のヒントになる部分がたくさんあります。

今日は3人の先生からたくさんのお話を聞かせていただき、感謝しています。これからも一緒に「教室でできる特別支援教育」を考えていきましょう。ありがとうございました。

(座談会取材は平成24年1月、内容、勤務校は取材当時のままです。)

※6 エンカウターの演習の1つ。友だちという鏡に映し出された自己像を見ることで、自己を肯定的に認めることができる。